



星 久人

ベネッセホールディングス  
特別顧問



2005年、前職のソニー時代、ベネッセの福武總一郎会長(当時)からのお声かけで、大賀典雄ソニー名誉会長(当時)ご夫妻とご一緒に瀬戸内海の直島を訪問する機会があり、それが、私の現代アートとの出会いとなりました(その翌年、まさか自分がベネッセに入ることになるとは、思ってもいませんでした)。直島は、昨今「現代アートの聖地」とまでいわれ、香川県の小さな島に世界中からお客さまが来られています。

上の写真は、昨年、文化勲章を受章された芸術家・草間彌生さんの作品「南瓜」の前で撮ったもので、この黄色いカボチャは、今や直島ベネッセハウスのシンボルマークとなっています。



瀬戸内海の直島にて

私にとって未知の世界であった現代アートに興味を抱くようになったのは、直島にある二つの作品を見たことがきっかけでした。一つは、真ん中にある三島喜美代さんの巨大なごみ箱をモチーフにした作品「もうひとつの再生 2005-N」です。ごみ箱の中には、古新聞、広告、空き缶、チラシが陶製オブジェとして放り込まれています。現代の使い捨て消費社会への強烈なアンチテーゼであり、情報に埋没している現代人の不安、危機感を表現しているように思われ、かなりの衝撃を受けたことを覚えています。

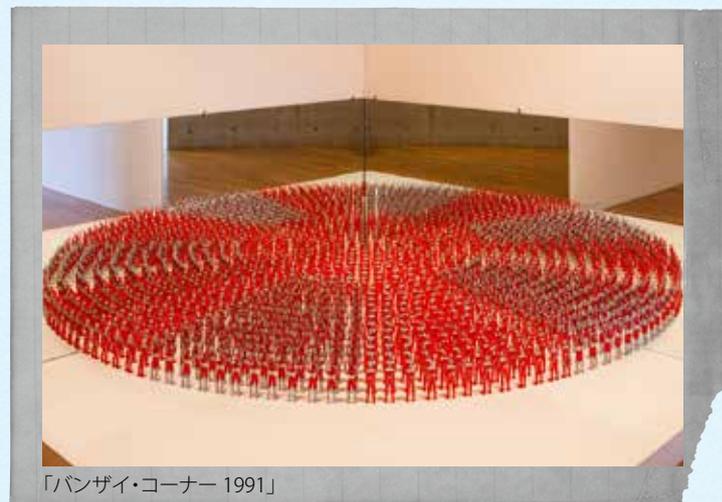


「もうひとつの再生 2005-N」

二つ目は、下の写真で、柳幸典さんの「バンザイ・コーナー1991」です。無数のウルトラマンが万歳をしており、全員が日の丸の中心に向かっており、戦後の日本の復興を支えたモーレツ社員が一致団結して国のために頑張ってきた、集団主義の発露とも読み取れます。ただ、よく見ると前方に直角に交わる2枚の鏡があり、リアルな実像は4分の1だけで、残りは虚像……「これは日本経済がバブルであったことを示唆している」と説明を受けたとき、現代アートの面白さにさらに引き付けられました。

福武オーナーがよく「現代アートの作品には、メッセージが込められている。どう解釈するかは自由、正解はない」と言わ

れますが、そのメッセージが何かを考えるとところにアートの面白さがあり、新しい作品に出合えると、心がワクワクしてきます。



「バンザイ・コーナー 1991」

ソニーでの私の人生がタテ社会の連続であったとすると、このベネッセのアートの世界はフラットなヨコ社会が果てしなく広がっていて、宇宙にまで届くような感覚になることがあり、至福の瞬間が訪れるのです。

現代アートの世界に引き込まれて  
—瀬戸内海の直島—